

資料紹介

中ノ沢こけしの特徴とその来歴

山口 拓*

はじめに

こけしは昭和初期および昭和30~40年前後に蒐集ブームが起きたことから、今でも年配の方の家にその姿を見るのはよくあることである。また、熱心な蒐集家が多かったことから、そのような方々のコレクションが何かのきっかけで博物館に寄贈されることもまた、決して珍しいことではない。福島県立博物館にもこうして寄贈されたこけしが収蔵されている。本年度はポイント展「福島のこけし、東北のこけし」として、これらの資料の一部を公開した。



図1 ポイント展 福島のこけし、東北のこけし

福島県のこけしというと、福島市の土湯温泉などで作られる土湯系こけしと呼ばれるこけしが広く知られているが、そこからさほど遠くない耶麻郡猪苗代町の中ノ沢温泉でも「中ノ沢こけし」と呼ばれるこけしが製作されてきた。この中ノ沢こけしは特徴的な容貌から妙な人気を得てきたが、中ノ沢自体が他のこけし生産地に比べるとその規模が決して大きなものではないために生産数も少なく、一般に注目されることもそう多くはなかった。特に近隣の土湯温泉が現在ではこけしをキャラクター化して温泉街をPRしたりと、こけしの街としてのイメージを作り上げてきたのに比べると、中ノ沢こけしの知名度は残念ながら比べるべくもない。しかし、2018年には後述するように新聞に取り上げられるなど、中ノ沢こけしを取り巻く状況にも変化がみられる。

そこで、本稿では中ノ沢こけしの特徴とその成立について、前述のポイント展ではふれられなかった点も含めて紹介させていただきたい。

東北の伝統こけし

こけしは東北地方特有の郷土玩具（各地方で考案・生産された、その地方の特色を持つ玩具）でありながら、今や日本全国で知らない者はないほど一般化した。これらのこけしは、ろくろで碗や盆などを挽くことを生業としていた木地師と呼ばれる木工職人が、仕事の合間に端材を利用し、子どものために作ったのが始まりとされている。東北で農民たちに湯治の習慣が定着したのは江戸時代後期以降とみられるが、それに合わせて木地師の多くも原料の木材が容易に入手でき、同時に木工品の需要にも恵まれた山間の温泉地やその周辺で仕事をするようになっていったと考えられる。そうした中で、やがてこけしも手軽な湯治土産として売られるようになっていったのだろう。こうした木地師たちは自分たちの始祖を文徳天皇の第一皇子である惟喬親王であるという伝承を持ち、それを示す鑑札や免許状を保持することも多いが、現在のこけし工人にはこうした流れとは出自を異にする通常の木工職人としてスタートを切った方も多くみられる。

また、「こけし」という名称が一般化したのは比較的最近のこととされている。もちろん「こけし」という呼び名はあったが、福島県内では「きでこ」「きぼこ」などと呼ばれることが多かったように、地域ごとの名称が存在した。それが昭和15年に東京こけし会がひらがな三文字の「こけし」に名称を統一すると決定。これが徐々に全国に広まり、「こけし」が一般名称化したとされている。

さて、現在作られているこけしは、①伝承を重んじる「伝統こけし」、②工人（製作者）の創意を反映した「創作こけし」に大別される。特に戦後、従来はこけしの生産が見られなかった観光地でも、お土産物としてこけしの生産・販売を行うところが増えた。そのため、従来から生産を行っていた地域では自らの作るこけしを、このような技法のみを模倣し

*福島県立博物館

て土地の風土に根ざさないお土産物としてのこけしと区別して「伝統」を冠することで、差別化を図ったものと考えられる。現在、伝統こけしの産地は東北6県に分布しており、津軽系（青森）、木地山系（秋田）、南部系（岩手）、山形系、肘折系、蔵王系（以上山形）、鳴子系、作並系、遠刈田系、弥治郎系（以上宮城）、そして本県の土湯系の11系統に分類されている。これらの各系統は頭や胴の形、目鼻や髪・髪飾りの描き方が異なり、それぞれの型を持っている。もちろんこうした型はあくまで原則であり、師匠や自身の性質から自然とそれぞれの特徴が現れてくるものであるし、各工人が創意工夫を凝らす事によっても同じ系統とはいえ個性的な表現が現れてくるものである。また現在では、「伝統こけし」を作る工人が、その一方で系統の型に囚われない「創作こけし」を作ることもよくみられることである。

中ノ沢こけしの特徴

このような系統立ての中で、中ノ沢こけしは地理的な要因も手伝ってか、近隣の土湯系こけしの一亜流と目されてきた。しかし、両者には似た特徴もあるものの、それ以上に明らかな相違点も多く、こうした系統立てに疑問の声が挙げられることも少なかつた。まずはその特徴について整理してみる。



図2 中ノ沢こけし

中ノ沢こけしを特徴づけるのは、第一にその顔立ちであろう。多くのこけしが細い切れ長の目、あるいは小さな目をしているのに対し、中ノ沢こけしは大きく見開いた目をしている。その目の周りを赤く塗ることもあり、それがまた容貌を派手に、特徴的にしているといえる。鼻も獅子鼻というか団子鼻というか、太く左右に広がった形をしている。頭は頭頂部が平になったお椀型で、胴の細さに比べると大きく感じられる。

その頭頂部は「蛇の目」と呼ばれるドーナツ状の模様塗りに塗られている。おそらくこうした容姿からであろう、中ノ沢こけしには「たこ坊主」という愛称が付けられて親しまれている。この名称をつけたのは郷土玩具に関する著作を記した童画家・版画家の武井武雄だとされており、事実昭和5年に刊行された『日本の郷土玩具 東の部』でも中ノ沢こけしを自身の挿絵付で紹介してい

る。また、これに対して頭頂部の蛇の目を緑がかった青で彩色したものを「青坊主」と呼ぶようなこともあるようだ。一方で胴部はろくろを回しながら線を描くろくろ線を入れ、そこに大きく桜や牡丹の花を描くことが多い。

中ノ沢こけしの製作工程

次いで、中ノ沢こけしの製作工程を紹介する。とはいえ、同じ系統であっても、細部の作り方はそれぞれの工人によって異なってくる。ここでは大要をつかむため、その概要を述べるに止めたい。

- ① 材料となる木の伐採・乾燥…こけしの材料となる木を伐採する。もっともよく使われるのはミズキ（水木）で、太すぎず適度な細さで、まっすぐに伸びたものがよいとされる。伐採の時期は11月～12月中旬くらいまで。その後、適当な大きさに切り分け、自然乾燥させて水分を抜く。現在は自分で伐採から行う工人はほとんどなく、材木を購入することも多い。
- ② 木取りを行う…乾燥させた材を頭部・胴部に合わせて、大まかな形に成形する。鉋などで大体の形に切りそろえ、電動鋸で整える。
- ③ 頭を挽く…複数の鉋を使い分け、形を削り出していく。形が整ったら、磨きに入る。用いるのはトクサ（木賊）を乾燥させて束ねたもの。これで押さえつけるようにしながらろくろを回すことで、磨きをかける。現在はサンドペーパー（紙やすり）を用いる工人もいる。磨いたら、ろくろを回しながら、頭頂部に蛇の目を描き入れる。

また、中ノ沢こけしは胴部に凸部があり、頭部の凹部にはめ込むことで一体化させるため、鉋で穴をあける。



図3 頭部を挽く



図4 「蛇の目」を描き入れる

- ④ 胴を挽く…頭と同じように、鉋で形を削り出し、磨きをかける。頭にはめ込むための凸部も鉋で削り出して作る。



図5 胴部を挽く

- ⑤ ろくろ線をつける…ろくろ線の模様をつける場合は、胴部をろくろにはめたまま、筆を当てるようにして回転させる。



図6 ろくろ線を描く

- ⑥ はめ込み…胴部を頭部にはめ込む。
⑦ 絵付け…顔や胴部の模様を書き入れる。
⑧ 完成…仕上げに口ウ引きをする。底面に工人の名前を入れて完成。

大まかな製作工程は以上のようなになる。もちろんこれは現代的な、電動ろくろが導入されてからの作

り方になるが、必要な工程そのものは大きく変化していないと考えられる。また補足ではあるが、掲載した写真では工人がろくろの軸に平行に（軸の側面に）位置取る「横挽き」で作業をしている。ただ、中ノ沢では、ろくろの軸に垂直に（軸の正面に）位置取る「縦挽き」で作業をする工人の方が主流とみられる。

中ノ沢こけしの来歴

このような特徴を持つ中ノ沢こけしは、どのように成立していったのであろうか。現在、この中ノ沢こけしは岩本善吉という人物が作り出したとされている。善吉は明治10年に栃木県宇都宮市に生まれた。元々は呉服屋の次男だったというが、幼い頃に親戚の芸妓屋に養子に入った。そのせいか、非常に芸達者な人物であったと伝えられている。その後、明治35年頃に上京し、浅草で木工の修行を始めた。ここでの年期を終えると栃木県の鹿沼市へと戻り、自らの工場を起こす。最初は上手く行っていたものの、最終的には事業は失敗。明治45年に産まれていた息子の芳蔵とともに、栃木県玉生村（現塩谷町）、福島県西会津町野沢、福島県喜多方市を渡り歩いたとされる。大正11年に友人から中ノ沢の話聞き、木地屋や雑貨屋を営んでいた山市商店（現山一屋商店）で働くようになる。ここでは当時、遠苧田からやってきた職人を使っていたが、善吉がやって来てからは、彼が技術的な指導を行うようになったようである。そして、ちょうどこのころからこけし作りを開始したとされている。

しかし、既に述べたような中ノ沢こけしの特徴がどこから発生したものは判然としない。善吉が渡り歩いた地域には大きなこけしの生産地はない。木地師としての仕事を考えれば、地理的に近い土湯温泉への行き来があったであろうことは想像できる。また、山市商店に遠苧田からきた木地師がいたことから、こけしも含めたその技術を見知っていたとも考えられる。しかし、土湯系こけしについては後述するが、遠苧田系こけしと中ノ沢こけしにはその描彩においてほぼ類似点が見当たらない。結局のところ現時点では、中ノ沢こけしの描彩は岩本善吉という工人が、様々なところからインスピレーションを得たにせよ、独自に作り上げたものと考えられないようである。

また、この頃から息子の芳蔵が木地の修行を始め、日光・箱根での修行を経て、昭和7年頃には中ノ沢に戻る。芳蔵は中ノ沢に戻ってからこけし作りに手を染めるようになるが、昭和9年には父善吉が死去、中ノ沢のこけし作りを背負うこととなった。この頃

はこけしの作り手は芳蔵を除けば2～3人しかおらず、しかも木地を挽くのはほぼ芳蔵のみで、他は描彩のみを手がけていたとも伝えられる。その後、昭和48年に亡くなるまで、芳蔵は中ノ沢で活躍を続けた。直接の跡取りはいなかったものの、請われれば拒むことなく多くの弟子をとって技術を伝えてきた。昭和46年にはこの内の9名が「たこ坊主会」を結成。こうした工人が現在も中ノ沢こけしを引き継いでいる。

土湯系こけしの特徴と中ノ沢こけしとの相違

さて、ここでは中ノ沢こけしとの比較の意味も込めて、土湯系こけしの特徴についても確認しておく。福島市の土湯温泉は、宮城県の鳴子、遠刈田と並びに本三大こけし発祥地といわれる。土湯で最初にこけしを製作したのは「みなとや」の佐久間亀五郎と伝えられており、1800年前後のこととみられている。明治初期には既にこけし製作が盛んだったようだ。土湯系こけしは土湯のみならず、福島市、飯坂温泉、二本松市岳温泉、川俣町、原町などでも作られてきた。これはそもそも土湯の木地製品がこれらの地域に販売されていたことに加え、明治23年の水害の影響を受けて製糸機業の器材製作を当てに木地師の移住が行われたことによると考えられる。



図7 土湯系こけし

土湯系こけしの型といえは頭頂部に蛇の目模様が入ること、紅のかせ（前髪と耳ぎわの髪の間にある髪飾り）を描くことが挙げられる。また、目は二重まぶたや、それが湾曲した鯨目と呼ばれる目をしており、鼻は丸鼻というのが特徴である。胴模様にはろくろ線が入るのは鉄則だが、線をUターンさせる返しろくろという技法を使ったり、花模様を入れることもある。加えて、土湯木地は元来小物の家具や、コマなどをはじめとする木地玩具を製作し

ていたこともあってか、笠やまげ、帽子などが付いたものもみることができる。胴は細長いものが多く、先の佐久間亀五郎の長男弥七の代に考案されたという、頭を胴部にはめ込む「はめ込み式」が主流である。

このようにみると、頭頂部の蛇の目模様、そしてろくろ線を用いる点は中ノ沢と共通した特徴といえ

る。ただし、既に述べたようにそれ以外の描彩については大きく異なる。また、土湯以外で土湯系こけしが作られている地域とは違い、土湯系の工人が中ノ沢に移住、あるいは技術を伝えたという話も寡聞にして聞かない。このような点から、長年に渡って中ノ沢と土湯との関連性が議論されてきたといえよう。例えばこけしの収集家であり研究家であった土橋慶三が「一部収集家の間に、善吉こけしを、土湯系に入れるのを否定したり、拒否するものなどがあったが、われわれは善吉こけしを土湯系へ編入するのに、少しの躊躇もしていない」（土橋1961）と述べるように、愛好家たちの間でもその評価が割れていたことがうかがえる。

中ノ沢こけしの評価と位置づけ

簡単にではあるが、ここまでみてきたように中ノ沢こけしは独自の造形的特徴と、それを作り出した歴史的背景を持っている。しかし、土湯という一大産地が近くにあり、類似する点もあることから、異論を含みながらも土湯系こけしの一亜流という位置づけが支配的であった。そもそも、独立した系統とみなすには中ノ沢は規模が小さ過ぎ、また善吉の存命中にはその製品もあまり売れていなかったという意見もある。例えば昭和15年に日本旅行協会から出版された『東北温泉風土記』を見てみよう。この書籍は東北各県の主要な温泉地の特徴や効能、交通アクセスを記したものであるが、同時に各温泉地のこけしについてもページを割いている。しかし中ノ沢については「（前略）店に並んでいる桔梗模様のコケシは横浜工業学校の某が図案せしもの、中の澤（原文ママ）が桔梗の名所なるに因んだものであろうが、関心出来ない。此地は、昔より各地の木地師の出入りはげしく落付がない」と手厳しい。この某については判然としないが、当時の工人については「現在作者、岩本芳蔵、酒井正進、本田信夫の三人」としている。時期的には善吉が亡くなってから5年前後の時期であろうが、たこ坊主の名称や特徴的な容貌については一言もふれられていない。その10年程前には武井武雄が自著の中で取り上げていたにもかかわらずである。

先の土橋は、中ノ沢こけしは「戦前にも、変わったこけしとして、一般に知れ渡ってはいたが、誰もが、その真価を認めた者は無かった。この真価が認められ、世の脚光を浴びだしたのは戦中から戦後にかけてである」としている。少し時間が経つが、昭和30年6月に東京こけし友の会が発行した『こけし手帖』第3号は、「岩本善吉号」と銘打って中ノ沢こけしを特集している。また、巻末には会が選んだ

こけしの頒布案内があり、「最近こけし界で非常なセンセーションを巻き起こした」中ノ沢こけしとして、岩本芳蔵の製品を選んでいる。こうした点からは、愛好家や収集家の間では次第にその知名度や人気が高まっていったことが推測される。

しかし、それも一部でのことであり、例えば昭和42年に刊行された『福島県史』第24巻では郷土玩具の項を設けてこけしにもそれなりの頁数を割いているものの、中ノ沢こけしについては数行の記述で終わっている。ここでは「たこ坊主」という言葉は使われず、「つりあがった目を持ついがみ顔が、グロテスクな感をいだかせる土湯系のもの」と評して、作者である岩本芳蔵の名を挙げるに留めている。

このように、時期や立場によって中ノ沢こけしへの評価や位置づけは変化してきたことが伺えるが、こうした変化は現在進行形でも起きている。2018年9月14日、福島民報と福島民友はともに、中ノ沢こけしの系統独立に関する記事を掲載した。これは同年9月1～2日に開催された第64回全国こけし祭りコンクールで「中ノ沢こけし」の表記が認められたことを報じるものである。中ノ沢の「たこ坊主会」は、土湯伝統こけし工人組合から「中ノ沢系」の呼称を認める承諾書を得た。コンクールの審査委員会は「中ノ沢系」という独自の系統としての表記はひとまず認めなかったものの、「中ノ沢こけし」という名称は認めており、系統独立も大きく現実味を帯びてきたといえる。

こうした流れの中で、工人や地域、愛好家によって、中ノ沢こけしがどのように評価され位置づけられていくのか、今後も注目に値するであろう。

おわりに

本稿では中ノ沢こけしの特徴と来歴について、その概要を紹介してきた。

セルロイドやブリキ玩具の登場により、おもちゃとしてのこけしは大正時代後期から衰退に向かうが、代わってインテリ層を中心にこけしに美を見いだす人々が現れ、昭和初期には鑑賞品として人気を博した。さらに昭和30～40年代の高度成長期には大ブームが起き、中高年男性を中心に蒐集熱が高まり、即売会やコンクールが行われたことで産地も活況を呈してきた。現在はこれに次ぐ大3次ブームといわれ、特に若い女性とその推進役とみられている。ファッション業界やキャラクタービジネスと結びついたこけしが製作されたり、各工人も新たなこけしを作り出そうと様々な創意工夫を行って新作を作り出している。中ノ沢のある猪苗代町でも、2016年に開駅した

道の駅猪苗代で中ノ沢こけしを販売するほか、2020年東京オリンピックにあたってホストタウンとして受け入れることになったガーナの大統領が来日した際に土産としてこれを贈るなど、地域の文化資源として活用しようとする動きがみられる。

とはいえ、現代においては過去のよう大きな盛り上がりではなく、「静かなブーム」といったところだろうか。中ノ沢においても、系統独立への動きという前向きなニュースもあるものの、工人の減少や後継者の不在といった大きな問題を抱えており、昨今のブームによって一朝一夕に解決できるものではない。

こうした中で、特に工人・地域、そして愛好家を含めた外部の人間がどのように相互に作用して、「中ノ沢こけし」の評価や位置づけを確立していくのか。その際にどこまでを受け継がれるべき伝統や技術とみなし、どの程度の変化を受け入れるのか。中ノ沢こけしの今後の動向に、しばらくは注目したいと考えている。

参考文献

- 会津若松市 2002『会津若松市史22 民俗編2 諸職職人の世界 暮らしと手仕事』
- 土橋慶三 1961『こけしの美』未来社
- 東京こけし友の会 1955「こけし手帖」第3号
- 『懐かしの沼尻軽便鉄道』編集委員会 2000『写真でつづる懐かしの沼尻軽便鉄道 沿線人々の暮らし・よろこび』歴史春秋社
- 『懐かしの沼尻軽便鉄道』編集委員会 2001『続・写真でつづる懐かしの沼尻軽便鉄道 思い出の学び舎と沿線の記録』歴史春秋社
- 日本旅行協会 1940『東北温泉風土記』
- 福島県 1967『福島県史24 各論編10 民俗2』
- 福島民報 2018年9月4日
- 福島民友 2018年9月4日